

森田眞希

さん

●NPO法人地域の寄り合い所また明日代表

人間は本来、分けることはできません。
どんなことも『我がこと』として丸ごと受け止める場でありたい。

東京郊外の多目的福祉施設「地域の寄り合い所また明日」では、認知症高齢者のデイホーム、保育施設、そして、地域の人が誰でも気軽に顔を出せる寄り合い所の3事業を一つ屋根の下で行なっている。近隣の人々がボランティアをしたり、ただふらりと立ち寄ってお茶を飲んだりすることもある。放課後の小中学生の居場所にもなっている。年齢も障がいも全ての垣根を超越する場所。そこには、新しい時代の地域共生のカタチがあった。

●取材・文……………太田美由紀（ライター）

赤ちゃんからお年寄りまで
誰でも気軽に寄れる場所

『また明日』ってどんなところ？

「あのね、犬もいて、猫もいて、赤ちゃんもいて、今にも死にそうなおばあさんもいるんだよ！」

これは、「地域の寄り合い所また明日」（以下「また明日」）によく遊びに行く小学生の女の子と母親とのやりとりである。保育士であり、この施設の代表でもある森田眞希さんは、バツが悪そうに娘のその言葉

を伝える母親にこう言ったそうだ。

「まさにその通りです！」

デイホームの管理者でもある、夫の和道さんは「おばあちゃんのことがかちゃんと入っついてうれいすね」と笑う。

「また明日」は、0、1、2歳を中心とした認可保育と認可外保育、認知症対応型通所介護施設、近隣の人たちが気軽に自由に出入りができる寄り合い所、3つの機能を併せ持つ施設である。アパートの1階の5戸分の壁を取り払い、大きな1フロアに全てが混在している。室内には、地域の人たちが

ら譲り受けた懐かしいデザインの家具があり、家庭のような落ち着いた雰囲気だ。

眞希さんと和道さんは、2001（平成13）年に小金井市内で「また明日」の前身となる「子どもとお年寄りの家 鳩の翼」を仲間と共に設立。小さな一軒家を借り、高齢者のデイサービスを運営し、その場所を地域に開放した。

「当時は、地域の力が減退していると言われていました。まだ子育てひろばなども充実しておらず、男性がベビーカーを押したり抱っこ紐をつけるような姿はあまり

見られませんでしたね。お母さんたちが孤立して行き場が無くなっていたので、赤ちゃんやお子さんを連れてうちに遊びに来てもらえないかと考えたんです。そうすれば、お年寄りと子どもたちが一緒に過ごせるし、お母さんたちの息抜きにもなる。そして、地域のつながりもできるといいなと思いました」（眞希さん）

分けられることなく
同じ時間を過ごす

「鳩の翼」を立ち上げる前、眞希さんは総

合病院の院内保育士として、和道さんは同法人が運営する特別養護老人ホームで介護福祉士として働いていた。眞希さんはあるとき、ダウン症の3歳の女の子との散歩の際に、同じ敷地内にある和道さんの勤める特別養護老人ホームまで足を伸ばした。

「そのとき、女の子が、認知症で寝たきりのお年寄りのベッドに潜り込んだんです。その方は、ぎゅつとその子を抱きしめ、愛おしそうに撫でてくれました。一瞬で、二人の間にはダウン症であることも認知症であることも全く関係がなくなりました。そ

のお年寄りはその女の子のことをただ愛おしいと感じ、愛情を与える側になった。そして女の子はそのきっかけを与えることができた。それぞれが主体となり相手を思いやり寄り添っている。『障がいがあるから』『寝たきりの高齢者だから』と決めつけているのは私たちなんだと気がつきました」

夫の和道さんもその光景を見ていて、その思いを共有したと眞希さんは言う。

「その日、帰宅してから、本来の福祉ってこういうことなんじゃないか、分けられることなく、みんなが同じ時間を共有できる場所を作りたいと二人で話しました」

和道さんは、「職員がお年寄りに介護という手段を与え続け、お年寄りが与えられ続けている関係性」に疑問を持っていた。何か違う関わり方がないものかと考え続けていたときの出来事だった。

Profile

●もりた・まき●

1969（昭和44）年、東京都生まれ。保育士。91（平成3）年上智社会福祉専門学校卒業。在学中に出会った森田和道氏（介護福祉士）と、卒業と同時に結婚。それぞれ、保育、高齢者福祉の分野で働き、2001（平成13）年4月に前身となる「子どもとお年寄りの家 鳩の翼」を設立。2006（平成18）年12月、NPO法人 地域の寄り合い所 また明日」を小金井市に開所した。



その後、富山型デイサービスの新聞記事を目にしたことで、実現できると確信を持った二人は、1998（平成10）年のNPO法施行、2000（平成12）年の介護保険制度のスタートに背中を押され、動き始めた。

「鳩の翼」では、スペースの基準が確保できず保育所を併設できなかったが、いつか保育所の併設も実現させたいと考えていた。そして、5年後の06（平成18）年12月、現在の場所であるアパートの1階を借りることができたため、二人は「鳩の翼」から独立。壁を取り払い広いスペースにリフォームして「地域の寄り合い所 また明日」をスタートした。

それまでの活動や二人の人柄をよく理解していた小金井市の行政担当者も後押ししてくれた。小金井市の介護保険事業や保育事業などそれぞれの現場は課を超えての風通しが良く「そういう場所が実現するといいね」と考えている人も多かったのである。

誰もが主体となって 支え合える関係を

19（令和元）年12月で14年目に入った。「また明日」では赤ちゃんからお年寄りま

る子や、赤ちゃんが泣いているとスツと抱き上げトントンと背中を叩いて上手に泣き止ませる中学生もいる。前の公園で汗だくになるまで遊んでトイレだけ借りに来る子もいる。夏休みには、そうめんを30束茹でたこともあったと眞希さんは笑う。

「私は団地で育ったのですが、わが家には近所の人たちが大人も子どもも自由に出入りしていました。私も買い物に行く人の赤ちゃんを見てあげてお駄賃をもらったりしていましたね。それと同じじゃないかな」

地域の人もボランティアに來たり、ただお茶を飲んで世間話をして帰ったり。保育園や高齢者施設の反対運動が起こる時代でも、「また明日」は地域に開かれ、地域の人たちに愛されている。今では、小金井になくてはならない場所になっている。

人間は本来 分けることができない

「世の中は赤ちゃんもお年寄りも障がいがある人もみんな一緒に暮らしているのに、施設となると分けられてしまうことに疑問を感じていました。いろいろな人が一緒にいることが社会にとっては自然なことだと思います」（眞希さん）

で、幅広い世代の人たちがわいわいと家族のように過ごしている。障がいがあっても、イスラム教徒で食事に配慮が必要でも、重い認知症でもみんな一緒。そして、保育所にもデイサービスにも、年間のスケジュールや一日の細かいプログラムは存在しない。そこには強い信念がある。

「子どもとお年寄りがただ一緒にいるだけではなく、誰もが主体となって、あるときは支え、あるときは支えられる。そんな、支え合う関係性が生まれる場所を作りたいと思っています」（和道さん）

「デイサービスの利用者さんは元気な方は子どもたちと一緒に散歩にも出かけますし、洗濯物を畳んだり、ミルクをあげていただいたりします。草遊びの上手なお年寄りは子どもたちにとっては葉っぱのおじいちゃんと呼ばれてとっても人気者でした。あまり食事の進まない方も、子どもたちが

私たちの社会は何かと分類されている。年齢や学年ごと、障がいがあるかないか、認知症かそうでないか。しかし人間は本来、分けることができない。福祉の分野は専門性を追求するために特に細分化されている。細分化された故に分けきれなくなり、溝に落ちてしまう事柄について、「うちの担当ではない」と言い切ってしまうことにも眞希さんは疑問を投げかける。

「もう少しフラットに、どんなことも『我がこと』として丸ごと受け止める場があり、人がいたほうがいいと思うんです」

「また明日」は、地域で活動している保健師とのつながりも深い。

「施設を立ち上げるとき、保育課や介護保険課、子育て支援課に挨拶にうかがいました。もちろん、健康課の保健師さんにも」積極的に連携してくれる人もいれば、民間からの働きかけにはあまり興味がないように見える人もいたという。

「私たちはこの場所の不完全さを自覚していますから、専門の目を持った方にフォローしていただきたいと考えています。ここに出入りしている子どもたちの育ち、健康面、家庭の状況など、私たちは担いきれないことも見えてきます。保健師さんに



門もインターホンもないアパートの1階部分。5戸分の壁を取り払った広いスペースで、赤ちゃんからお年寄りまでがのんびりと1日を過ごしている

アーンしてとスプーンで勧めると、パクツと食べてにつこりする方もいます。そんなやりとりからスタッフもたくさんさんの学びを受け取っています」（眞希さん）

「また明日」で行われているのは、生活の管理ではなく、ごく普通の暮らしだ。しばらく同じスペースで見学していると、スタッフは全体の安全を静かにサポートしながら、それぞれの主体的な動きを尊重していることが分かる。

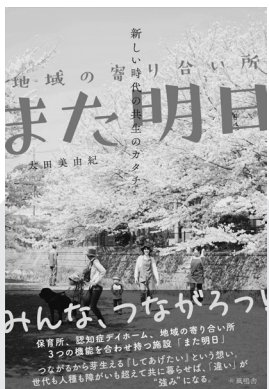
「また明日」の隣には広場のような公園があり、放課後になると小学生が遊びに来る。「ただいま！」と顔を出しておやつを食べ

はいつも、『また明日』を利用している方々やスタッフへのアドバイスをいただいていますし、家族を多角的に一緒に見守ってもらっています」

虐待や発達の心配、家族の抱える問題などは、一面だけでは捉えきれないことがある。さまざまな情報を持ち寄り、連携する必要性を眞希さんは感じている。

「高齢者はケアマネジャーがいてケース会議がありますが、子どもにはケアマネはいません。だからこそ、その子やその子の家族にとって、何ができるかをみんなで考える場が必要だと思います」

小金井市には「また明日」と長年つながりを持ち、連携し合える保健師がいる。「子どもたちの育ちを一緒に見守り、一緒に楽しんでくれる保健師さんが全国にもっともっと増えるといいなと願っています」



日常の様子を克明に記録したドキュメント『新しい時代の共生のカタチー地域の寄り合い所 また明日』（風鳴舎）発売中